

Y-G 性格検査による本学体育専修生の性格特性に関する一考察

中林 忠輔・深町 明夫

An Investigation into the Special Personality Characteristics of Physical Education Majors at this University Based on the Y-G Personality Test

Tadao Nakabayashi · Akio Fukamachi

1. はじめに

体育専修は実技を伴う教科を学ぶという他教科には見られない特徴を持った専修である。また、知育、徳育、体育という教育の目標の立場で見ても、身体を通しての教育の全てを受け持つ教科でもある。そのような特徴を持った体育専修生は、教育者としての素養が求められると同時に、運動技能に対しても多様な種目に対応できることが求められる。現実には、全ての運動種目に対処できることが望まれるが、一方で、その目的を遂行するには、運動部へ所属し、各自、専門の運動種目領域を奥深く追求することが必要条件になっている。したがって、体育専修生は、教育者（指導者）としての側面と、スポーツ選手としての側面を保持している。

性格の面から見ると、運動部での生活経験が多くなるにしたがって、一般学生との間の性格特性の差は大きくなり、活動性、支配性、攻撃性、社会的外交性は増大し、抑うつ性、神経質傾向は減少する。しかし、思考的内向性、気分変易性、客観性、協調性などの特性では変化しないとされている。また、女子選手の「女らしさ欠如」、「支配性大」の傾向が

見られるなどや、粗野、非熟慮的などのように反社会的評価を受けるものもある。

一方、教育の立場で見ると、望ましい教師の人格特性として、12要素の一つとして上位を占めていること、成功した教師の特性をして、性格特性がその中の10%を占めており明朗、円満、反省的、温和、ユーモア感、あたたかい人間味、まじめ、不平をいわぬ、自制心などをあげている。好かれる教師に関しても、人格や性格に関するものが半数以上あげられている。教師の悩みでも、自分の性格を一要素としてあげられている。

一流選手が必ずしも一流の指導者になるとは限らないとの言葉があるが、スポーツ選手と教育者との間に、それぞれの性格特性が存在していることを暗示させていると考えられる。本学の体育専修生は体育学部生と違い、教育の道を強く志向する学生の集団であると推察されるが、反面、スポーツ活動においても大いに活躍して欲しいという側面もある。この一見、矛盾した学生の行動が、性格にどのように反映されているかの実態を把握することが本研究のねらいである。

本研究の目的は、体育専修生が教育者、スポーツ選手としてどのような性格特性を持っ

ているかについての実態を把握するために、Y-G 性格検査を用いて、教育者としての特徴との比較、スポーツ選手としての特徴との比較（個人種目と集団種目群に分類して、それぞれの特徴を一流選手との比較）を行い、Y-G 性格検査の尺度レベルの考察、因子レベルでの考察、プロフィールの判定を行い、収集した資料を分析・検討することによって、今後の体育専修生の指導の際の基礎資料を得ることである。

2. 研究の方法

(1) 対象

文教大学体育専修生 昭和57年度生～昭和63年度生 男子152名 女子114名 計264名

(2) 調査日時

各年度生の2年次10月

(4) 調査内容

Y-G 性格検査、運動経験（高校）、所属運動部

表1-1 YG 性格検査 男子 (152名)

上段 \bar{X} , 下段SD

群	57	58	59	60	61	62	63
人数	22	24	25	31	24	11	15
D	8.5 6.98	▲6.1 5.40	▲5.4 5.49	▲7.7 5.21	▲6.8 4.45	8.8 4.90	10.1 5.44
C	9.2 6.12	7.9 5.41	7.3 5.14	9.7 4.92	8.6 5.18	9.6 3.20	11.1 3.49
I	7.1 6.12	▲4.9 3.63	▲5.2 4.87	7.8 4.52	5.5 3.88	6.0 4.07	8.3 4.48
N	8.48 5.85	6.6 4.66	6.9 5.48	7.2 3.98	▲6.4 4.07	8.9 6.12	10.8 4.72
O	6.9 4.21	5.9 3.72	▲5.6 4.37	7.2 4.19	6.5 4.15	7.4 2.91	8.5 4.14
Co	▲5.7 3.49	6.5 3.73	▲5.6 3.49	6.3 3.22	▲5.5 3.23	6.9 3.53	7.4 2.77
Ag	13.0 3.57	12.4 3.54	12.0 4.49	13.1 4.09	13.0 4.71	11.5 3.33	▲13.4 3.79
G	12.5 4.71	13.8 3.66	13.0 4.30	12.1 4.00	12.1 4.13	11.5 4.87	11.9 4.77
R	▲14.2 4.38	▲13.7 4.30	▲13.8 3.25	▲13.7 3.80	12.8 4.58	▲14.7 2.72	▲13.4 4.07
T	10.2 4.67	12.2 3.90	11.7 4.81	11.9 4.03	11.6 4.58	10.7 4.10	10.3 2.72
A	11.4 5.91	▲13.1 4.06	▲13.0 4.26	▲12.3 4.03	11.4 4.39	11.6 3.88	9.9 4.00
S	▲15.21 4.91	▲15.7 3.76	▲15.6 3.63	▲14.8 4.32	▲14.9 4.58	▲14.9 3.31	13.1 4.32

(5) 結果の処理

尺度レベル—因子レベル, 平均, 標準偏差, t 検定, 相関係数, プロフィール判定—パーセント, χ^2 検定

集計は統計分析入門 (ランテクス) を用いた.

(6) 研究の進め方

①男女別, 各年度生の尺度レベル, 因子レベルでの分析.

②男女別, 各年度生別のプロフィール判定

の分析.

③男女別・個人・集団種目別の尺度レベル, 因子レベルでの分析.

④男女別・個人・集団種目別のプロフィール判定の分析.

(7) 研究の限定

① 個人・集団種目の分類は, 個人種目にテニス, バトミントンも含めた. 集団種目はネットを境に, 身体接触がない種目を集団A群, 同一コート内でプレイヤー

表 1-2 YG 性格検査 (女子114名)

上段 \bar{x} , 下段 SD

群	57	58	59	60	61	62	63
人数	19	20	15	18	19	12	11
D	▲ 8.3 4.47	▲ 8.0 4.90	▲ 8.1 2.75	10.8 4.63	▲ 8.8 6.27	▲ 5.5 4.89	▲ 5.2 3.97
C	8.1 5.02	10.4 4.79	▲ 7.2 2.66	9.4 3.82	10.7 5.37	7.7 3.54	7.8 4.12
I	7.4 4.21	7.7 3.59	7.2 2.88	8.6 4.27	8.6 5.43	▲ 4.8 3.04	▲ 5.5 3.72
N	▲ 6.5 3.04	7.2 3.71	▲ 6.9 3.77	7.2 4.03	10.1 5.41	▲ 4.3 3.26	▲ 4.9 4.09
O	7.5 3.06	7.0 3.76	5.6 2.18	7.3 2.69	7.5 3.73	6.6 2.91	▲ 5.2 2.48
Co	5.2 3.15	5.7 3.31	4.8 3.31	6.8 3.39	7.0 3.61	4.8 2.89	5.9 3.91
Ag	10.8 4.39	▲ 13.2 4.51	9.8 4.84	11.1 3.57	11.2 4.79	9.4 3.32	10.5 4.46
G	13.9 2.81	14.5 3.99	13.5 3.36	12.4 3.34	▲ 14.5 3.36	13.6 3.96	▲ 14.9 3.73
R	▲ 14.4 3.00	▲ 15.0 4.34	▲ 12.4 4.63	▲ 13.8 3.99	▲ 13.7 3.87	▲ 14.7 2.50	▲ 15.1 3.81
T	▲ 12.4 3.64	▲ 11.4 4.46	▲ 11.1 4.47	▲ 11.2 4.05	▲ 10.7 4.99	▲ 12.2 5.01	▲ 13.9 4.50
A	▲ 13.8 2.82	▲ 13.1 4.56	10.4 4.96	▲ 12.2 4.03	▲ 12.9 4.52	▲ 12.8 5.36	▲ 13.7 4.73
S	▲ 16.0 2.73	▲ 17.2 2.39	13.3 4.71	▲ 15.8 3.58	▲ 15.5 3.73	▲ 16.6 3.12	▲ 16.1 2.70

が混在する種目を集団B群と分類した。

- ② 高校から大学への種目変更者については現在の種目とした。また、非所属者については高校での種目を採用した。
- ③ スポーツ集団としての対象は57, 58, 61, 62, 63年度生で男子96名, 女子81名について調査した。

3. 結果と吟味

1 男女別・各年度生別の尺度レベル, 因子レベル

表1-1, 2は尺度レベルでの実態の結果である。▲は5段階の標準点から見て, 各尺度の標準段階から逸脱する程度である。情緒安定(D, C, I, N)では, 男子25%, 女子61.9%が逸脱している。社会的適応(O, Co, Ag)では, 男子23.8%, 女子9.5%が逸脱している。内省的(尺, T)では, 男子42.9%, 女子100%が逸脱している。主導権(A, S)では, 男子64.3%, 女子85.7%が逸脱している。

2 男女別, 各年度別のプロフィール判定

表2は男子, 女子のプロフィール型を示し

たものである。男女共, D型(安定適応積極型), A型(平均型), B型(不安定不適応積極型), C型(安定消極型), E型(不安定不適応消極型)の順でD型が半数であった。情緒安定性は男子74.4%, 女子で73.7%, 積極性は男子85.6%, 女子で92.2%であった。E型は男子3.9%, 女子で1.8%であった。

3 男女別, 個人・集団種目別の尺度レベル・因子レベル

表3-1, 2は尺度レベルでの実態の結果である。▲は5段階の標準点から見て, 各尺度の標準段階から逸脱する程度である。男子の結果。情緒安定(D, C, I, N)では個人が20%, 集団Aが75%逸脱している。社会的適応(O, Co, Ag)では各群とも33.3%逸脱している。内省的では各群とも100%逸脱している。主導権(A, J)では個人, 集団Bが50%, 集団Aは100%逸脱している。女子の結果。情緒安定では各群とも20%逸脱している。社会的適応では逸脱している尺度は見られない。内省的では個人・集団Aが100%, 集団Bが66.7%逸脱している。主導権では各群とも100%逸脱している。

表2 YG性格検査プロフィール判定

上段人数, 下段%

群	男子								女子							
	57	58	59	60	61	62	63	計	57	58	59	60	61	62	63	計
人数	22	24	25	31	24	11	15	152	19	20	15	18	19	12	11	114
A型	0	2	4	4	3	4	3	20 13.2	2	4	4	4	1	2	1	18 15.8
B型	6	4	4	9	3	1	6	33 21.7	6	6	2	5	6	1	2	28 24.6
C型	2	1	5	4	3	0	1	16 10.5	1	2	3	0	0	0	1	7 6.1
D型	12	17	10	14	14	6	4	77 50.7	10	8	6	9	10	9	7	59 51.8
E型	2	0	2	0	1	0	1	6 3.9	0	0	0	0	2	0	0	2 1.8

表3-1 Y-G 性格検査者種目別 男子
上段 \bar{X} , 下段SD

群	個人	集団A	集団B
人数	32	21	43
D	▲ 6.8 5.29	▲ 6.1 4.09	9.3 6.20
C	7.8 4.98	8.0 5.52	10.1 4.52
I	6.3 4.88	▲ 4.9 3.68	6.8 4.78
N	8.2 4.94	▲ 5.0 3.77	8.9 5.40
O	6.0 3.86	6.3 3.81	7.8 3.96
Co	▲ 5.8 2.71	▲ 5.7 3.20	6.9 3.87
Ag	11.8 3.79	12.9 4.40	▲13.5 3.51
G	11.6 4.35	13.1 4.29	12.8 4.33
R	▲13.2 4.34	▲14.1 4.38	▲13.7 4.02
T	▲10.9 4.19	▲12.8 2.96	▲10.5 4.41
A	11.7 5.22	▲12.6 4.51	11.1 4.22
S	▲15.0 4.85	▲16.0 3.97	▲14.3 3.98

表3-2 Y-G 性格検査者種目別 女子
上段 \bar{X} , 下段SD

群	個人	集団A	集団B
人数	38	22	21
D	▲ 7.0 4.55	▲ 8.3 5.84	▲ 7.5 5.46
C	8.9 4.83	9.7 4.58	9.1 5.18
I	7.1 3.81	7.1 4.48	7.1 5.10
N	6.7 4.19	8.5 4.87	6.3 4.84
O	6.7 3.34	7.1 3.34	7.1 3.46
Co	5.2 2.10	5.6 3.33	7.0 4.27
Ag	11.4 4.07	10.3 4.15	11.9 5.42
G	▲14.8 3.19	14.0 3.79	13.5 3.68
R	▲13.8 3.21	▲13.9 3.89	▲16.4 3.37
T	▲11.2 4.57	▲13.5 3.28	▲11.6 5.27
A	▲13.5 3.87	▲13.6 4.69	▲12.5 4.68
S	▲16.8 2.69	▲15.7 3.15	▲15.9 3.19

男子・女子共に各尺度の粗点をそれぞれの群間での関係を見たものが表4である。その結果、全ての群間に有意な関係が見られた。

平均値と標準偏差から $\bar{x} \pm 1/2SD$ を算出し、その値が逸脱している尺度は、男子17尺度中2尺度で11.8%である。女子17尺度中8尺度で47.1%である。

表5-1, 2は各尺度を各群間での差の検定をした結果である。男子の結果、Dでは集

団Aと集団Bの間に、Cでは個人と集団Bの間に、Nでは個人と集団A、集団Aと集団Bの間に、Tでは集団Aと集団Bの間に有意な差が見られる。女子の結果、尺度では個人と集団B、集団Aと集団Bの間に、Tでは個人と集団Aの間に見られる。男子4尺度、女子2尺度と男子には情緒安定で、女子は内省的で差が見られる。男子では集団Aと集団Bの間にN尺度で顕著な差が見られ、女子では個

表4 各群の関係

$P > 0.01$ ($r > .708$)

	男子			女子		
	個人	集団A	集団B	個人	集団A	集団B
個人		.961	.943	.956	.940	.950
集団A			.922	.956	.933	.966
集団B				.908	.866	.918
個人					.963	.956
集団A						.922
集団B						

人と集団A, Bの間にR尺度で顕著な差が見られる。

4. 男女別, 個人・集団種目別のプロフィール判定

表6は各群のプロフィール型と各群の関係を示したものである。男子の結果。D型(安定適応積極型)12.5%, B型(不安定不適応積極型)20.8%, A型(平均型), C型(安定消極型)7.3%, E型(不安定不適応消極型)4.2%である。女子の結果。D型54.3%, B型25.9%, A型12.3%, C型4.9%, E型3.5%である。男子, 女子共に同じ傾向を示している。

表5-1 各尺度の各群との差の検定 男子

** $P < 0.01$, * $P < 0.05$

群	個-集A	個-集B	集A-集B
D	0.54	-1.88	* -2.46
C	-0.13	* -2.06	-1.51
I	1.19	-0.44	-1.75
N	* 2.67	-0.58	** -3.35
O	-0.28	-1.98	-1.46
Co	0.12	-1.45	-1.31
Ag	-0.94	-1.98	-0.55
G	-1.24	-1.18	0.26
R	-0.73	-0.51	0.35
T	-1.93	0.40	* 2.46
A	-0.67	0.53	1.28
S	-0.82	0.67	1.61
Lf	53	73	62

表5-2 各項目の各群との差の検定 女子

** $P < 0.01$, * $P < 0.05$

群	個-集A	個-集B	集A-集B
D	-0.90	-0.36	0.46
C	-0.64	-0.15	0.40
I	0	0	0
N	-1.45	0.32	1.49
O	-0.45	-0.43	0
Co	-0.48	-1.75	-1.20
Ag	1.00	-0.37	-1.08
G	0.83	-1.36	0.44
R	-0.10	** -2.89	** -2.26
T	* -2.26	-0.29	1.40
A	-0.08	0.83	0.77
S	1.37	1.20	-0.21
Lf	58	57	41

表6 各群のプロフィールと各群との関係

**P < 0.01, *P < 0.05 (r > .878, .959)

群	男 子				女 子			
	個人	集団A	集団B	計	個人	集団A	集団B	計
人数	32	21	43	96	38	22	21	81
A型	4 12.5	1 4.8	7 16.3	12 12.5	4 10.5	2 9.1	4 19.0	10 12.3
B型	5 15.6	2 9.5	13 30.2	20 20.8	11 28.9	7 31.8	3 14.3	21 25.9
C型	4 12.5	1 4.8	2 4.7	7 7.3	2 5.3	2 9.1	0 0	4 4.9
D型	18 56.3	16 76.2	19 44.2	53 55.2	20 52.6	11 50.0	13 61.9	44 54.3
E型	1 3.1	1 4.8	2 4.7	4 4.2	1 3.6	0 0	1 4.8	2 2.5
個人		** .981	.866		* .929	* .981	* .956	
集団A			.823		* .900	.853	* .957	
集団B					* .982	* .970	* .889	
個人						* .990	* .915	
集団A							.855	
集団B								

群間との関係において、男子と集団B、集団Aと集団Bとの間に異なる傾向が見られる。

表7は因子レベルで各群と比較した結果である。情緒因子では安定で男子集団Aと集団Bの間に、不安定で男子個人と集団B、集団Aと集団Bの間に顕著な差が見られる。適応因子では、男子集団Bと集団Aの間に、女子個人と集団B、集団Aと集団Bの間に顕著な差が見られる。向性では顕著な差は見られない。

4. 考察

体育専修生男子においては、抑うつはなく、協調性があり、のんきで、支配性があり、社

会的外向の傾向を示していると考えられる。

女子においては、抑うつはなく、神経質でなく、活動性があり、のんきで、思考的外向で、支配性があり、社会的外向の傾向を示していると考えられる。

教育者の側面から見ると男子、女子共に支配性が高いということは社会的指導性、リーダーシップのある性質と社会的外向が高いという社会的接触を好む傾向が見られ、正の要素として考えられる。対して、男子、女子共に見られるのんきさの性質は、活発であると同時に、衝動的な性質の傾向もあり、全て正の要素とはいえないと考えられる。女子において思考的外向の傾向が見られたことは、教

表7 情緒, 適応, 向性から見た各群の比較
単位 %

情緒	安定	平均	不安定	
m a	68.8	12.5	18.7	情・安 ** m b - m c
m b	81.0	4.8	14.3	情・不 m a - m c
m c	48.9	16.3	34.9	
f a	53.9	10.5	31.5	
f b	59.1	9.1	31.8	
f c	61.9	19.0	19.1	
適応	適応	平均	不適応	
m a	56.3	25.0	18.7	適・適 ** m b - m c
m b	76.2	9.6	14.3	f a - f c
m c	44.2	21.0	34.9	f b - f c
f a	52.6	15.8	31.5	
f b	50.0	18.2	31.8	
f c	61.9	19.0	19.1	
向性	外向	平均	内向	
m a	72.9	12.5	15.6	
m b	85.7	4.8	9.6	
m c	74.4	16.3	9.4	
f a	81.5	10.5	7.9	
f b	81.8	9.1	9.1	
f c	76.2	19.0	4.8	

m-男子, f-女子, a-個人, b-集団A, c-集団B
 x^2 ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, d f - 1, $x^2 > 6.63 > 3.80$

育者にとって大切な熟慮する反対の傾向なので負の要素になると考えられる。また、一般学生に比べ本調査でもG尺度が高得点の傾向になっている。

体育専修生として一般的に考えられている、活動的で和を大切にしている特徴で、男子におい

て活動的な傾向は平均で、女子において協調性の傾向は平均で、主観と客観に差が見られる。

プロフィールの判定では、男子、女子共に情緒安定、社会適応、外向性のD型が半数を占めている。また、男子、女子共に情緒不安

定、社会不適応、外向性のB型も20数パーセントを占めている。教育者にとって必要な情緒の安定、社会への適応でないタイプの学生がY-G性格検査の一つの客観性を持った検査で多数表れたことは、今後の学生指導に一つの指針を与えてくれる結果になった。

次に、スポーツマンとしての性格特性からの特徴を列挙してみると、男子の結果、各群共に同じような傾向を示している。その中で、D尺度の集団Aと集団Bの間に差が見られ、集団Bが抑うつ性の強い傾向が見られる。C尺度の個人と集団Bの間に差が見られ、集団Bに気分の変化がある性格を見られる。N尺度の集団Aと個人、集団Bの間に差が見られる。集団Aは神経質でない傾向が見られる。集団Aが、スポーツマンの特徴をよく表した群で、次に個人、集団Bの順である。各群共に各尺度において分散が大きく、異なった性質が相殺されて、平均型によっている傾向が見られる。

女子の結果、各群共に同じような傾向を示している。R尺度の集団B、個人と集団Aの間に顕著な差が見られ、集団Bにのんきさの性質が強い傾向が見られる。T尺度の個人と集団Aの間に差が見られ、個人に思考的外向性が少ない傾向が見られる。各群共にスポーツマンの特徴をやや表している。

男子と女子の比較で、それぞれ群の特徴を表しているのが、男子では情緒的な面で、女子においては内省的な面と異なっていた。

プロフィールの判定から見ると、男子は個人がAD型、集団AがD'型、集団BがA'型であった。女子各群共にAD型であった。型の分布では男子では個人と集団Aが似ており、女子では個人と集団A、Bが似た傾向が見られた。集団Aと集団Bの間には、男女共に似た傾向は見られない。男子では集団Bに、女子では個人と集団AにB型を示す学生が見られた。しかし、女子の場合にはAB型が顕著に多かった。

因子レベルで見ると、情緒が不安定な群は男子集団B、女子個人、女子集団Aに多く見られた。社会不適応の群は男子集団B、女子個人、女子集団Aであった。逆に情緒安定、社会適応している群は男子個人であった。向性では各群とも外向性を示していた。

5. まとめ

今回の調査の対象である学生は過去・現在実際に授業、部活動を通して指導した学生であり、大多数の学生は部活動を熱心に行い、教職についている者達である。主観的には彼らの性格を把握していた訳であるが、Y-G性格検査という客観的な検査を通して、改めて彼らの性格特性を考えていった時、主観的なとらえかたと客観的なとらえ方に相違が見られ、指導の際の留意点にしたいと考えている。一つは性格特性の多様化があると考えいたが、情緒不安定、社会不適応の教育者としては負の要素をもっている者がかなりの割合で出現したことである。また、内省的な面で教育者としては熟慮を必要とするのに、大多数の者が平均でしかないことは考慮する必要があると考えられる。のんきさの性質が見られたことも、活発である反面、衝動的な性質と考えると注意を払う必要があると考えられる。

一方、スポーツマンの性格特性として見た時、B型の出現頻度に男女共各群間に差が見られ、文献によるスポーツマンタイプは男子集団B（野球、バレーボール）群一つであった。男子集団B（サッカー、ラグビー、バスケットボール等）群を除いた群はややスポーツマンタイプであった。女子集団B（バスケットボール、ハンドボール）群はプロフィール判定ではAD型であったが、D型タイプの者が多い群で他の群と異なっている。

Y-G性格検査ではD型人間が最も理想的な人格の持ち主で、情緒的にも安定し、社会適応もよく、活動的で対人関係もうまく行く

タイプであり、学校でも問題性は少ないと手引で述べられている。また、同じ環境に置かれていても、人格が異なっていれば、行動は同じにならないし、同一人物であっても、置かれた環境に変化があると異なった行動をとる。過去の研究結果でも、対象が異なると一見して逆の結果を示している場合もある。性格は運動で特定のスポーツを長く続けているとスポーツ生活が環境的要因として働いて、そのスポーツに適した性格が形成されていく、逆にそのような性格であったから、その種目を選択する等の考え方があり、今回の調査の結果のように性格特性には一定した法則はあまり見られない多様化された実態になったと考えられる。今後の課題としては、より多くの客観的検査を行い、それぞれの検査の関係

を見定めた上で、性格の特徴を把握していきたいと思います。

引用文献

- 1) 小林晃夫：スポーツマンの性格（性格からみた運動技能上達への道，杏林書院，1986.
- 2) 花田敬一他著：スポーツマン的の性格，不昧堂，1972.
- 3) 日本スポーツ心理学編：スポーツ心理学Q&A，不昧堂，1984.
- 4) 松田岩男：現代スポーツ心理学，大修館，1976.
- 5) 松田岩男：運動心理学入門，大修館，1976.
- 6) 体育心理学実験指導研究会編：体育心理学実験実習概説，1981.
- 7) 教師養成研究会，教育心理部会編：教育心理学，学芸図書，1965.